

水戸藩主と額田村 — はるとし よしのぶ 治紀と慶喜の逸話から —

那珂市歴史民俗資料館

<鈴木家と第七代藩主治紀の逸話>



鈴木家住宅（書院）

水戸藩の歴代藩主は、江戸から水戸へ帰国するたびに水戸家の墓所である常陸太田の瑞龍山に参拝する。その往復の途中で、額田村南郷の庄屋であり、二代藩主光圀の養女万姫の嫁ぎ先でもある鈴木市十郎宅へ立ち寄っている。

七代藩主治紀が訪問した時のことである。書院の座敷に通され着座した際、御側役の通事に対して「床の間に掛け置かれる物は誰の筆であるか。」と下問された。通事は「これは義公様（二代藩主光圀）の御筆でございます。」と答えた。

これを聴かれた治紀は、すでに床を背にして南面して着座されるように用意されていた二畳台を西向きに敷き返させて着座された。「義公（光圀）御筆の懸け物を背にしては着座などできない。」とのことであった。

<額田村寺門治平宅にて…慶喜が父「斉昭」親筆の前に端座>

明治26年1月27日、慶喜の母登美宮吉子（斉昭夫人）が逝去されて、常陸太田の水戸家墓所瑞龍山に埋葬された。その葬送に来られた慶喜が、その帰途、額田村北郷の庄屋寺門治平宅に宿泊された。その時の記録が、家臣であった渋沢栄一が編さんした『徳川慶喜公伝』4に記されている。

額田の宿（常陸国）にて寺内（寺門）治兵衛といふ者の宅へ御一泊あり。座敷へお通りの後、連日の疲労もあらせらるるに、端然として正座し給い、聊かもくつろがせ給う様なかりければ、治兵衛は深く恐懼しけるが、やがて思う所やありけん、床に懸け置きたる烈公（慶喜の父「斉昭」）親筆の諸軸を巻き納めて、外の軸に懸け替えければ、公は始めて御安心のさまにて、くつろがせ給いきという。

父「斉昭」の掛け物を背にして、とても安座は出来ないとの思いであった。



宿泊の際の枕屏風



斉昭（景山）親筆の掛け物「義を見て為さざるは勇無きなり」

いずれも、二代藩主光圀、九代藩主斉昭への尊崇敬意・孝行を示すエピソードとして光彩を放っている。